解　説

編集委員座談会

学会誌への投稿文化を育むには

Cultivating a Culture of Academic Journal Submissions

出席者：矢野耕也（日本大学），明吉秀樹（明吉事務所），植　英規（福島工業高等専門学校），鏑木哲志（群馬県立群馬産業技術センター），窪田葉子（元(公社)日本水環境学会），坂本雅基（花王），近岡　淳（近岡技術経営研究所），細井光夫（コマツ），水谷淳之介（富山高等専門学校）

1．なぜ論文は増えないのか

1.1 「論文が増えない」という問い

坂本：これまで編集委員会座談会では，学会誌の意義と課題，品質工学の価値，他学会との連携，ITの進展，継承・普及，QEスクエア見直しについて話し合ってきたが，学会誌の直近の課題としては，論文がなかなか増えないことが挙げられると思う。そこで今回は，どうやったら論文を投稿してもらえるかについて話し合いたい。

近岡：学会の根幹の課題である。

窪田：テーマとしては大事だが，解決策があまりないのかなと思われる。

近岡：簡単な解決策はないだろう。ただ大会での発表件数は結構ある。そこから論文化してほしいと，毎回メールで投げかけているが，あまり出てこない。

坂本：地方の研究会のベテランの方がサポートする等，今までそういう案は出てきているが，実際にはなかなか動いていない。

近岡：公設試などの地方の公的な研究機関では，相談員という制度は作っている。ただ，論文投稿を支援するところまで踏み込んでいるわけではない。論文投稿は今まで学会誌に投稿した経験者でないと，その基本の構成・書き方がうまくアドバイスできないことがある。

最初は基本的なところでつまずくと思うので，論文投稿の経験者をメンターとして学会が認定する制度を作ることも良いのではないだろうか。そういう人たちが窓口として学会に登録されて表に出てくれば，「この人に相談すればいい」と論文投稿しやすくなると思う。

ただ，なってくれる人をどうやって探すか，学会が「貢献してよ」といっても簡単ではないので，ある程度のインセンティブも必要と思う。論文を書く気持ちになる雰囲気を醸成していくのが課題である。

矢野：最近の働き方の問題や，社会全体に流れるコンプライアンスの部分も少なくはないのではないか。かつては自己啓発の一環で論文化に取り組んでいた人もいたと思われるし，場合によっては人材育成として学位取得が許されていた時代もあった。また残業時間の管理も曖昧であったので，仕事の延長上で書いていたケースもあったかと思う。あと全般的に社外発表に関しても現在に比べてもう少し寛容であったと感じるが，最近は秘密保持の関係もあって公表が容易ではないように思えるし，自宅に持ち帰って取り組むようなことも可能なケースもあったが，現在はそうはいかないであろう。また学術団体への投稿となると，ある程度のハードルの高さもあり，社内の報告書よりも一段高いレベルが要求されるが，そこまでの余裕がないように感じる。

1.2　なぜ企業は学会から遠ざかるのか

坂本：会社の中で論文を書くモチベーションがどうなのか，という話もよく出る。